復刊第11号

日本女医史刊行に際して

会長　佐藤やい

かって、日本女医会創立五十周年記念事業として、日本女医史の編纂が計画されました。

故吉岡会長始め、役員一同史料の蒐集に努力いたし、特に故多川澄子、杉田鶴子両女史及び、福田幹子女史が目的達成のため、種々御協力されておりましたが、多川、杉田両女史も逝去され、一方長い期間に亘る戦災その他の障碍のため、一時は中絶状態でありました。

その後、再度日本女医史の刊行について検討を重ねた結果、福田幹子女史始め各役員の多大なる御熱意により、日本女医史編集委員会を設立と同時に、執筆者秋山龜三氏の御協力の下に多年の懸案であった本史の刊行を見るに至ったのであります。

今や日本女医会も、時代とともに広く国際的交流を重ねてまいりました折柄、本史の出版により、古来からの女医の沿革ならびに、六十有余年以来の日本の女医の歴史、伝統を網羅いたし、また荊の道を開拓された先輩諸女史の苦闘により、今日に及ぶ女医の真価を紹介されました事は、真に意義深いものと存じます。

ここに先輩ならびに編集に関係された皆様方に謝意を表する次第であります。

回を重ねる〝国際女医会〟

小野春生

本年十二月三十日より、マニラで開催されます国際女医会総会もいよいよ間近にせまってまいりました。十二月二十九日エァーフランスにて全員十九名が羽田を出発する予定です。

日本女医会代表として（敬称省略、順序不同）野呂幸枝、岡本幸子、黒田幽香子（以上三名、加多乃会）森川房子、上田はる、森田キヨ、三浦道子、鈴木文子（以上五名、鶴風会）渡辺佐和（名古屋医大）岡崎豊子、森川みどり、津田露、延島秀子、今井久子、仁尾千枝子、飯沼さち子、阿部秀世、吉岡敏子、小野春生（以上十名、至誠会）が参加することに決定しました。

代表者一行は数回に及ぶ準備会を開き、今回の総会テーマである〝一般医と親教育〟に関して、わが国の現状について話し合ってまいりました。国際女医会でとりあげられたテーマは、あまり他の医学会ではとりあげない国際医学の問題の方が、勉強になり、又興味深いとされているようです。

たとえば、

一九六〇年（於ロンドン総会）思春期の問題。

一九六二年（於バーデン、バーデン理事会）老令婦人について。

となっております。

国際女医会で交換された知識は今後、わが国の実情に即して取捨選択し、社会に役立てて行くために、PRして行くことも必要なことかと考えております。

マニラ会議の前後には欧州、米国より多数の方々が来日する予定になっております。

常に多忙な生活に追いまわされている私達女医は、この際多少の犠牲を惜しまず、世界各国の女医と手を結び、胸襟を開いて語り合う機会を利用いたしましょう。

東洋の婦人は家の中にばかりとじこもっていると思いこまれているようですが、日本女医会々員に逢いたいとの要望に答え、大いに社会で活躍していることを活潑な雰囲気でもって示すことが出来る筈です。

前号の会誌紙上で、外国女医との接待の件につきお願いしましたところ、関西、東京から御協力下さる数名の先生の御申出がありました。人数が少ないので今度は外国語の出来る先生は勿論のこと、お話しになれなくとも逢って下さる御意志のございます先生方是非本部まで御申出下さるようお願いいたします。会合の期日が定まりましたら御通知いたします。

日本女医会編「日本女医史」を読みて

川那部喜美子

女医といえば吉岡弥生と云う私の観念聯合的結びつきは、このたび本書を読むことによって、少からず是正され、しかも強められた。

（明治十八年、漸く輝きを増した頃の文明開化の光りの下に、日本最初の公許の女医の名乗りをあげられた荻野吟子氏をはじめ、女性であるが故に受けねばならなかった、もろもろの困難を克服して、初志を貫かれたわれ等女医の先覚者達の立派さ、そして次代の女医のために、正規の平坦な女医養成の大道を造り上げ今日の女医の発展を致された、吉岡弥生先生の偉大さと、その業績の重要性に認識を新たにした。

又、この間にあって女医が世に出るために、温かい理解をもって行動された男性達に、深い尊敬を感じ、女医達の人間像の記録には強い親近感を覚えた。

九月十六日、日本女医会理事会の席上で、待望の本書の出来上りが告げられ、手渡された一冊を、帰阪の車中で一気に読み通し、あちらこちらと読み返して朝になった。これはその内容が、私の関心が深いことにもよるが、執筆者秋山龜三氏の資料の吟味精選と独自の才能によりかもし出された味いと香りの魅力によるものであることは申すまでもない。唯一つ、関西人である私には、市井の一開業医で終始された生涯に、卓抜した人格識見とその行動力を、一流の人生観によって、常に後進の女医に範を示され、関西医会の

第一人者として、女医のために万丈の気を吐かれた福井繁子先生についての記録が余りにも少いことは、何としても淋しいことであった。

しかし巻頭の写真の頁、巻末の年譜は、簡潔に味い深く、読者に本書編纂の目的と意義を伝え、本文を十分に補っている。

日本女医会の意義ある仕事が一つ出来たとの感が深い。

「日本女医史」について

大村ひさゑ

「日本女医史」が出版された。記念すべきことである。歴史である以上多くの資料によって著述したであろうことはもちろんであるが、しかし著者の博引傍証には驚くのほかはない。

序章には、海のワニを欺して海を渡ろうとした稲葉の白兎を救った大国主命を、いわばわが国における女医の出現の原因をなしたとしている。面白いが、これは歴史以前の神話である。

第一章は医学のはじまりについて古墳時代についてのべ、大化改新、奈良朝時代、平安朝、鎌倉時代と、医学の歴史的発展を跡づけている。しかしこの時代の医学は科学的合理主義からは程遠いものであり、なんらかの秘儀、あるいは仏教的な色彩の強いものであったことはいうまでもない。

われわれのもっとも興味と関心をひくものは近代西洋医学がわが国に移植された明治以後である。いまは遠くなってしまった明治はいわゆる文明開化のけんらんたる時代であり鹿鳴館が代表する欧化一辺倒のゼネレーションであった。この時代にわが吉岡弥生先生は故郷で少女期をおくったのである。

明治も二十年前後となって女医としてはじめて荻野吟子、つづいて生沢クノ、高橋瑞子、吉岡弥生等々が出現した。この当時の女医は、何かしら自恃のおもいが非常に強く女医であるというエリート意識が強かったようである。荻野吟子は明治初期の有名な外交官の森有礼をある理由で難詰し自己の要求を承諾させた。

高橋瑞子は、自分の氏素性を決して人に語らなかったという。嫂とけんかして婚家をとび出し、妾の家に女中として住みこんだ。まけん気の瑞子は着物を縫うのに一切自分で工夫して誰にもたずねなかった。

このようなことがのべてあって興味つきるところを知らない。

著者自身が「後記」で「女医界の今日あるは、吉岡弥生あっての隆昌であるといっていい。筆者もまた吉岡弥生に多くの頁を割いたが、大方の認めるところであろう」と言っているのは極めて適切な言葉である。極端にいうならば、吉岡弥生先生の自叙はそのまま日本の女医史であるといっても過言でない。さらに著者がことわっているように「日本女医史」は吉岡先生の終焉をもって終っている。

しかし吉岡弥生先生の歿後といえども「日本女医史」はなくなってしまうものではないが、歴史に記述され後世に伝えられることは、傑出した人間の劃期的な出来事だけである。

誰が今後の女医界の歴史の歯車を廻転する担い手となるであろうか、残された大きな課題であろう。

本書は単に女医史ばかりでなく、明治初期から今日までの日本の「文化史」的な役割をも演じ大きな意義をもっている。

私が本書に注文をつけるならば巻末の「人名索引」と「事項索引」がほしかったということである。著者は「日本女医史主要年表」があるから、といわれるかもしれないが、これだけでは人名から本文を引くには不便である。

再版の折には考えてほしいものである。（日本女医会本部発行。九百円）

日本女医史を読んで

宮入せつ子

昭和十六年の神崎清氏の「吉岡弥生伝」より、更に膨大な「日本女医史」誠に面白く、かつ感激を以って読ませていただきました。

神代における女医神話むづかしいうちにも諧謔をまじえ、更に巧みに読者をして文中にひきこんでしまう名文でございます。又江戸篇における野中婉女の幽囚四十年の頃、誠に胸をうつ哀えんの記でございますが、婉女の女としての心情に触れる瑞々しい筆致に、単なる伝記的なるものを越えた香気を放つものと存じます。明治時代の幾多の傑出した女医の後にわれ等の校長吉岡弥生先生を見出し、今更のごとく先生の偉大さに胸をうたれ心のふるえるのを覚えます。かくの如き英傑の踏み開いて下さった女医というものの、その後に続く幾多の中の一番末尾にもせよ、その栄光の余光の中に歩ませていただいている、はしくれの一人として大いに奮起しなければならないと、ひそかに頬を赤くしていさみ立っているものでございます。おのおの道は違えど至誠を以って生きぬいてまいりとうございます。

（福田幹氏えの書信の中より）

日本女医会
大阪支部総会開催に関して

橋本恵美子

秋色もようやく濃くなった十月二十八日、久しぶりに大阪支部総会を開催出来たのは何にもまして嬉しい事でした。一昨年十一月、大阪に於て始めて日本女医会総会が開かれ、全く予想外の盛会裡に幕を閉じました事は、既に本誌第六号に掲載、皆様もまだ記憶に新しい事と存じます。その翌年の一月、福井先生の米寿を祝う会を催しましたのが先生との最後の集会になり、七月末福井先生が不帰の客となられて以来、心にかかりつつ本年八月役員会を開くまで、大阪としての動きは残念ながら休止の状態にあった訳でございます。こんな事では余りにダラシナイ、と云う事でいろいろ検討致しまして、今回の総会を持つに到ったのです。考え方によってはこの一年半余りの休止は、ある面ではプラスでありまた、一面マイナスも大きかったと思われますが、ともかく再び活動開始の体勢をととのえ得た事は、やはり喜ばねばならないと思います。しかし従来から大阪在住の女医の頭の中には、この会は一体日本女医会の支部会なのか、

または独立した大阪府女医会なのか、と云う疑問が常にあった様でございます。この点について私は役員会の席でも総会の際にも一応は説明申上げましたが、再度この紙面をお借りして皆様に申し述べ、御納得戴ければと思います。正統な名称は、日本女医会大阪支部である事に間違いありません。

去る九月の本部理事会の席上で、私が御提案申上げ、一応内諾を得ました〃大阪支部増加の件〃も全くこの線にそって会員の獲得、会務の周知徹底、行動半径の拡大等を目的とした提案でありました。ただ私共大阪の女医としましては、故福井先生が戦後まだあちこちに焦土の跡が点々としていました頃から、大阪府下の女医の結束と、社会えの進出を強く訴えられ、共鳴した有志で会合を持ち、これを大阪府女医会と名付け活動して来たのでございます。日本女医会は戦前から故吉岡会長の御意志で出来上っていたもので、戦後その復活が些か遅過ぎましたが、大阪にも一支部がこの時誕生致し日本女医会の傘下に加入した訳です。

従ってその成り立ちは自ずから違っており、私共は福井先生を会長とした大阪府女医会員でありまた、日本女医会大阪支部会員でもあった事になります。その後日本女医会が国際的発展をとげ、国際女医会加入資格団体として、つまり一国一単位しか認めないと云う国際女医会の規約に基き、日本女医会が日本代表となった頃から、国際女医会たらんとする為には、まず日本女医会員でなければその資格を得られないと云う事が、段々理解出来、大阪府支部と大阪府女医会とは、ここに名実共に表裏一体にならなければ、その発展は大きく期待出来なくなって来たと云う事でございます。つまり、大阪府支部、即大阪府女医会と云う形で現在まで運営されて来ております。この際こんなヤヤコシイ名称をつけないで支部一本で行く方が正しい姿勢かも知れません。が、私共大阪人としては、折角ここ十数年呼びなれて来た名前でもあり、地元では府女医会と云う名がしたしみやすく、通り名として残しておきたいと思うだけで、前記の如く支部と云う観念には変りない事を、御了解ねがえれば幸甚に存じます。これに関連して支部増設の件ですが、この点については、役員会でも総会でも全員に賛同を得ました。しかし何分まだ試案中のものですので、今後の役員会に於て更に具体的検討を加える必要があります。

もう一つ、今後の大阪女医会の運営方向として、これまでの女医誌各号にもいろいろと御意見のあります通り、結局、何かしなくては女医会と云うものの存在の意義がない。何の為にわざわざ女医会を作る必要があるのか。利害得失を一にした同じ医師会員である私共が、そこから新たに抜け出して別個に女医会員を名乗る以上、そこにはそれだけの理由と価値がなければならないと云う点でございます。

その意味から、日本女医会が国際女医会に加入し世界共通の場を持った事は、たしかに女医会存立の一つの大きな意義を示しております。国境を越えた人間同志の触れ合い、学問、文化の交流。これ等は全く重要な人間形成の道でもあります。しかしそれを除いた後には何が残るのだろうか。日本女医史の出版も偉大な事業でございました。が仕事仕事と云った所で、私共女医の多くは家庭を第一義的に考えなければならない〃女〃としての生き方を必要とされています。仕事よりも先ず夫、子供の幸福の為に……。そしてその上に医術と云う〃技〃が生かされている。と云ったごく自然な道を素直に歩む事が女医の大方の希望である事は、個々の幸福と云う点に於て全く正しいと思われます。多くの男医の中に混って、同じ様に働き、同じ様に税を取られ、また勇気さえあれば権利を主張する事も出来る、それだけで充分でないか。と云う声もよく耳にします。だから、女医会は、女医会だけにしかない魅力を作り、それを育てて行こうと云う意欲を燃やさせる何らかの目的が必要なのです。女の知慧は浅はかだ、大体責任感がとぼしすぎる、感情的だ、だから大きな仕事はさせられない。こう云った男の既成観念をそのまま受け入れる事がどんなに女の成長をはばんでいるか。各地域における個々の女医の力は仲々発揮しがたく発言も弱い事は事実です。だから、せめて男と同じだけの話題、知識判断力を養う必要があるし、無理に男より優位を誇らなくとも、せめて女だから何も分りません、と云う態度だけは捨てて行きたい。

よく喋るがどうも云う事がトンチンカンだなどと云われる様なお喋りはしたくない。それにはやはり女の団結で以って力を養い、研究心を高め、正真正銘男女同様で話し合える努力をしなければ、女医会がそう云う会であってほしいのです。

これは一つの考え方に過ぎませんが少くとも女医会が親睦会である段階は過ぎたと思っております。大阪としては、新しき立直りに際し先ず、府医の協力団体として強力に働きかけ、女医に適した分野の仕事を分担する事からはじめたいと申上げた所、当日の懇親会の席には府医の理事を招いてその具体案等について話し合おうと云う事になり、誠に画期的な会の盛り上りを見た訳であります。今年末マニラの国際女医会に出席された各国女医が日本にも多数立寄られるだろうと思いますし、来春大阪に於て日本医学会の祭典もあると云う多彩な行事が次々に予定されて行く事でもあり、その意味に於ても今回の総会のその意義たるや躍如たるものを感じた次第です。総会開催までの企画、演出、また当日の司会、議事進行と私としては過分の仕事をおまかせ戴いた面目にかけても、是非共すっきりした大阪女医会の再出発を期待して微力をつくして参りましたものの、長い休止、また時候柄と云う悪い条件の関係もあって出席が今一つふるわなかった事を残念に思います。今後は、支部も増やして頂き女医は一人残らず進んで加入してもらえる様努力を重ねて参るつもりでおります。

（三七・十一・五）

支部だより

◎石川県支部

米林梅子

去る九月三十日（日）午後二時から犀川の流れをのぞむ金沢市長良町金茶寮の一室で総会を催しました。

一、開会の辞　早稲田かめの副支部長

二、本部報告伝達、荒井梅子支部長

三、昭和三十六年度会計報告、早稲田副支部長

四、講演〃最近話題の新薬について〃

第一製薬学術課長　上田義雄先生

五、閉会の辞　荒井梅子支部長

以上

過ぐる七月二十四日夜荒井支部長の近くの東別院出火の際、隣家まで類焼支部長宅は辛うじてその難をのがれられたのでありますが、その時の当支部からのお見舞に対して謝意を表されました。

◎日本女医会大阪府支部総会要項

日時　十月二十八日　午後二時

会場　大阪市東成区医師会館

総会通知案内発送数　三〇〇、出席者　四四、委任状　二九、以上により

総会成立。

総会次第

司会　橋本恵美子

(一) 議長選出　推薦により川那部氏議長

(二) 開会の辞　菅沼志津子氏

物故者　鳥居和代、井ツタエ、福井繁子、原田弥、志水年子、以上五氏に対し黙禱

(三) 報告事項　富山艶子、生田明子氏

事業報告は庶務村木貞子氏、当日欠席につき一覧表提出さる。会計報告三十三年度～三十七年度。

尚会費値上げの件は三十八年度よりと決定。

(四) 議　事

その前に動議として

① 顧問制を設ける件及び会則一部改正案を図り可決

② 支部増加の件

試案としては先ず十ブロックに分けたものを刷物にして会員に配り検討してもらう事にした。東京はどうなっているかと云う質問に対し、現在一区一支部制になっている関係で、二十四支部程あり、二十四名の支部長がおられる。名簿による会員数約九〇〇名としてその比率から大阪も大体十支部位は作れるが、これを本部で認めるかどうかは未定、と説明し了解を得る。

(五) 役員改選

時間の関係で今回は、支部長一名副支部長三名のみの選出とする役員会では菅沼氏を会長に推薦する事に意見一致した旨伝えたが、菅沼氏から発言あり、堅く辞意を表明さる。会員中より、この際さっぱりと公選にしてはと云う意見があり。この動議を採決する事に賛同を得たのでにわかに投票用紙を作るやら配るやら一騒ぎしたが結局、川那部氏が得票数多く支部長となる。つづいて副支部長も選挙してはと云う意見も出たが之は従来通り学校別推薦と云う線で中村範子(至誠会)浜田乙女(鶴風会)富山艶子(加多乃会)と決定

(六) 講演大阪医大助教授鈎スミ子氏

記事次回掲載予定

(七) カラー映画

(八) 閉会の辞　浜田乙女

以上で総会を終え、続いて懇親会

以　上

◎静岡県支部

中沢種代

去る九月九日、日曜を利用して久しぶりに日本女医会静岡県支部総会が開催されました。会するもの五十三名、須川県衛生部長を来賓に迎えて昭和三十一年の発会時と同じ出席率でございました。然し今回の特徴は会費は全部只、バスの送り迎えに至るまですべてマッケンヂーとおっしゃるアメリカ夫人よりの御招待を受けての会合であったという事です。こんな願ってもない機会を私達に与えて下すったのは、かねて同夫人と特別に御親交深い川野辺先生の御尽力によるたまものでございました。マ夫人は静岡市の名誉市民第一号であられ社会教育、福祉方面に大いに活躍されている方で、その風貌に触れるだけでも私達の為になるからとの川野辺先生の御言葉に正に違わず七十余歳とは思えぬ若々しい堂々たる御体軀から溢れ出る高潔な人格と人間愛を自然と感じとることが出来、心の内に深い感激をみなぎらせつつ外は海辺の松原を庭園の一部に取り入れた二千七百坪もある邸宅、騒音と黄塵から全く遮断された別天地の緑の芝生の上にテントが張られて整然と並べられた椅子、テーブル涼しい浜辺の風に頬を撫でられながら会は進行いたしました。

→静岡市高松・マッケンヂー夫人邸にて。三七・九・九)

須川部長から衛生行政に関係する広範囲にわたるお話を沢山きかせて頂き大いに知識を広めることが出来、役員改選を行い、川野辺先生が新支部長に選ばれました。マ夫人御手づからなる数々の美味しいアメリカ風御料理に舌づつみを打ち、会が終ってからはホームラン、玉ころがしなどのゲーム遊びに打ち興じ、しばしの間誰もが童心に帰ることが出来非常に楽しく過しました。家屋の内部も見せていただきましたが、物の豊富さ、立派さに一驚しましたけれどそれよりも、室内の清潔と調度品の整然さにはすっかり感心させられました。最後に御手製のクッキーを御土産に一人一人頂戴して云いしれぬなごやかな気持に包まれながら皆んなニコニコして、全く予定の時間ぴったりに差しまわされは送りのバスの中の人となりました。

◎逝　去

謹んで御冥福を祈ります。

揚節子氏(昭和十二年関西医大卒)兵庫県西宮市木津山町八ノ一、昭和三十七年七月死亡。

◎日本女医史を申込まれた会員の方で未着の方がありましたら御一報下さい。尚残っておりますから御希望の方は本部まで御連絡下さい。定価一冊送料共九百円。

◎会費未納の場合は請求書同封してありますから、振替用紙を御利用の上御送金をお願いします。

◎国際女医会資金をつくるため、会費十ケ年分前納して頂いております。御協力をお願いいたします。

◎おわび

前会誌上で堀口文(豊島)氏死亡と記載いたしましたが、神奈川県支部の堀口文氏の誤りでした。深くおわび申上げます。

◎支部会開催の折は支部だよりを本部まで御一報願います。

編集後記

先輩の多川澄子女史は七年前の四月に物故された。その告別式の時、私はその告別の辞の中で「あなたが踏みはじめておいて下さったこの道を、どんな故障が出来ても必ず歩んでゆきましょう、そうしてあなたの始めておいて下さった女医史を完成しましょう」とそう誓ったのです。霊に向って誓ったこと、これは神えのちかいです。それから私は寝ても起きても女医史でくらしてきました。ここに日本女医会その他の皆さんの努力のおかげで、いよいよ出来上りました。私はただ呆然といたしました。それほどの感激でございます。おかげ様で予約も殆ど発行部数の近くまでございましたが、この上とも一部残らず皆様に御愛読いただき、重版もいたしたいと思っております。何卒この上とも御支援をお願申上げます。

(三七・一〇・三〇日　福田幹子)

昭和三十七年十一月二十五日印刷
昭和三十七年十二月一日発行
編集人　福田幹
発行人　日本女医会
発行所　東京都新宿区市ケ谷河田町19
印刷所　東京都港区麻布田島町63　福田印刷株式会社

日本女医史

日本女医会編

—日本女医史箱（見本）—

『日本女医史』遂に完成

—御申込受付発売中—

日本最初の公許女医荻野吟子

吟子の夫志之方善（中央後方）

神代より昭和に至る女医史は、そのまま波瀾万畳興味津々たる日本女性史であります。即刻御申込み下さい。

日本女医史・全
A5判 布装特製豪華本
本文三二〇頁写真多数
定価九〇〇円・〒不要

日本女医会本部・東京都新宿区河田町十九番地・電話341局〇九六八番・振替東京六九九六八番

一月）合格。

一九〇八（明治四一）

福井繁子ドイツ留学より帰る（六月）。荻野吟子北海道より帰京し本所小梅町に開業（一一月）。

大阪関西医学院廃校となり、在校の女子学生上京して日本医学校、または東京女医学校を選ぶに至る（一二月）。

山尾うら、左座（春日）かねを、井出（竹内）茂代、堀ちよ、中川だい、高須いま、杉田鶴子、川崎とも、富原ゆく、諸石トキ、菅野イチ、原トリ（道子）、桑原うめ枝（一二月）合格。

杉田鶴子女医として最初の東大小児科介補となる（一二月）。

一九〇九（明治四二）

石川松枝（日本医学校出身・二三歳）同校卒業生の医術開業試験合格者二八名中の第一位となり、男子皆顔色なしと評判さる（三月）。

菊池ゑい（一月）、土田せん、宮田邦子（三月）、善行地玉与、江間貞子、神山超子（一一月）合格。

東京医師倶楽部医学講習会（明治三四年開講・神田美土代町）医術開業試験廃止の時期近きため閉鎖す（一二月）。

一九一〇（明治四三）

中央医学研修所（本郷壱岐坂小学校内・明治四一年開講・講習生中に女子数名あり）閉鎖す（三月）。

婦人共立育児会病院（施療小児科）飯田町に設立、院長弘田長博士（東大教授）医員に山尾うら、杉田鶴子、町田満、内田節ら女医のみを採用す（三月）。

開業試験合格者激増し、女医二二名生まる（四月）。

曽根操、中川（明山）もと米国ペンシルバニア女子医大卒業帰国し、ともに同志社博愛病院に勤務す（八月）。

一九一一（明治四四）

東大整形外科介補北村静子、日本外科学会（東京）において女医最初の学会研究「先天性足内翻症治療成績について」を発表す（四月）・山中貞子、大阪灘波病院学術集談会にて「縫合糸の細菌学的研究」について報告す（六月）・幣原節子大阪緒方病院学術集団会にて「子宮腔固

日本女医史・明治篇（組方見本）

開業試験への苦闘　開業試験は年に二回――春、秋。「願書を出してから試験まで、半年ですね。その間は、死ぬ気で本当にやるのです。二月、三月に迫ってくると、床を敷いて寝ないのです。先輩が皆そうしてやるから……机をこう前に置いて、ランプで、坐って……眠くなってくると、そこへ突俯す、眼がさめると又勉強する、とそういう状態で、皆な、骨と皮ばかりに痩せるんです。それは誰でもそうなので……」（小出みね）「口でも動かしていたら、寝ないだろうというので、豆を食べて……」（多川澄）先生は、大学勤めの余暇を利用してくるので、「朝の二時間位は、ランプをつけて講義を聴いたものです。宅を朝三時半から四時頃出掛けましてね、先ず書物の包みを首に結んで、股引を穿きまして……」（大村のぶ）。

明治23年前期試験合格の記念撮影，左より中原篷，伊藤房野，吉岡弥生．

というふうで、その合格率はおおむね三割、弥生は済生学舎在学一年で明治二十三年に前期を受ける。この時の受験者十六人。結果は、伊藤房野、中原篷、斎藤かね、吉岡弥生の四人だけが合格、弥生はうれしさに有頂天になって、同じ思いの伊藤、中原と誘い合せ、裕福な伊藤房野に費用の一時立替えを頼み、浅草へ生まれて初めての行楽を決行した。

十八間四面の観音堂に眼を瞠り、公園裏の江崎写真館で記念写真を撮り、「矢場」といわれて遊治郎の集まる魔窟とも知らず、白粉臭い女